
けいおん！？

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！？

【Nコード】

N1541M

【作者名】

橘天龍

【あらすじ】

あたし、柏木春菜と友達の中野梓は桜高へ入学して…

けいおん！の二次創作作品です。軽音部内の二年生が梓1人（部活外なら憂とかがいるけど）なので登場させてみました。

#1・入学！

『あつた…』

「あ、春菜も？私もあつたよ」

今日は桜ヶ丘高校の入試の合格発表の日。私と小学生の頃からの友達の中野梓は合格発表の合否が貼り出された掲示板で結果を見ていました。

あ、私は柏木春菜。梓と同じ中学三年生で、来年からここ…桜ヶ丘高校に入学予定です。

「じゃあ私達の腐れ縁もまだ続くのかあ…」

『あ、梓酷い。私は嬉しいのに』

「あはは、ごめん」

梓は苦笑いしてました

『とりあえず今日は合格祝いパーティーだね』

「うん」

私達は遠くで受験生以上に喜んで周りにお礼を言う家族らしき人の声を聞きつつ、校舎を後にしました

『明日は入学式かあ』

あれから数日経ち、今日は入学式前日。私は愛用のベースのチューニングをしつつ呟いていた

やっぱり高校に入ったら軽音部かな。梓はどうするんだろ。やっぱりジャズ研なのかな…梓はジャズが好きだし。

私はロックとユーロビートが好きだけど、ユーロビート研なんてあるわけないしなあ。

それから私はほどなくしてお母さんに呼ばれたので入浴を済ませて眠りにつきました

「私はあればジャズ研がいいかな」

入学式当日。私と梓は桜ヶ丘高校への道程をゆつくりとした足取りで登校していました

「春菜はやっぱり軽音部？」

『そうなるかな。私は運動は好きじゃないから体育会系の部活は嫌だし、他の文化部もとくに入りたいのってないし』

「ジャズ研はどうか？」

『それもパス。梓には悪いけど、私の音楽性の対極だもん』

「音楽性が真逆なのによく私たち友達やってるよね」

『…よくわからないけど、違うからこそ…じゃないかな?』

「え?」

『全く同じなら疲れちゃうからじゃないかな。それと同じジャンルでもさらに細かく分類できると思うし。梓だってたまにはロックやユーロビートも聴きたくならない?』

「確かにそうかも。あのテンポは気持ちが高揚するよね」

『つまりはそういうこと。ジャンルが違うから拘りで対立することがないし』

「…よくはわからないけど、なんとなくわかった」

梓がやや呆れながら苦笑いを浮かべた

それから入学式。どこの学校もそうだけど、やっぱり校長先生の話は長かった

んで、今は教室。知り合いは梓しかいないからまったり雑談をします

「でね、ーなんだよ」

『へー、それはキツイね』

梓と会話しているとふと視界に入った同級生らしい子が気になった。

…あ、入試合格発表の日に家族がハイテンションだった子だ。

「……でさ、…春菜？」

『あ、ごめん。何？』

「何じゃないよ、どうかしたの？」

『うん、ちょっと気になる子が居ただけ』

「……………春菜って、そっち趣味？」

何がだコラ。

誤解してドン引きする梓に理由を説明して納得させ、2人で下校。

それで今は夜。私はいつも通りにベースの練習をしつつ明日のことを考えていた。

『明日は新入生歓迎会があるんだっけ。どんな部活があるんだろ』

軽音部も歓迎会で演奏するのかな。どんな人達なんだろう…

ボーッとまだ見ぬ軽音部メンバーを妄想してるとお母さんに呼ばれたので入浴を済ませ、寝間着に着替えてから眠りについた。

新たな出会いを期待しつつ。

2 話へ

#1・入学！（後書き）

けいおんなのでゆったりまったり更新していきます

オリジナル主人公設定

名前：柏木春菜 かしわぎはるな

声のイメージ：伊藤かな○

身長：梓よりやや高め

容姿：黒髪をポニーテールにして背中まで伸ばし、後頭部にゴムの髪留めで纏めている。瞳の色は色素の薄い黒（茶色ではない）で梓と同じくらいのつり目。童顔。でも澪より若干劣るがスタイルもいい。

性格：しっかり者だがわりと面倒くさがり。順応性が高く梓より早く軽音部メンバーに馴染んでいく。

愛称：ハルにゃん（唯命名）

備考：梓とは小学四年生からの付き合い。それ以前はアメリカに住んでいた。右利きのベースリストで実力は梓と同じくらいだが、感覚で掴む天才肌なので人に教えるのは苦手。バンド演奏時の立ち位置は澪の隣（左側）

軽音部メンバーへの呼称：唯…唯先輩

澪…秋山先輩

律…部長

紬…ムギさん

梓…梓 そのまま

その他の知り合いの呼称：憂…ういるん

和…和先輩

さわ子…山中先生（後にさわ子先生）

追加・修正はあるかも

#2・新歓！（前書き）

主人公の一人称が変わってますが仕様変更ですのでおきになさらず
：

#2・新歓！

翌朝。

いつもの時間に起きたあたしは寝汗を流すのに軽くシャワーを浴びてから着替えを済ませて制服に袖を通した。

『今日は新入生歓迎会があるんだっけ。どうなるのかな…』

一人呟いてから朝食をとる。ちなみにあたしは朝食をちゃんと摂らないと昼までもたない体質なので朝は洋食ではなく和食だ。

あたしの感覚では洋食はおやつ、もしくは軽食といった感じなので全然足りない。

ちなみに今日のメニューは納豆御飯とわかめと長ネギが入ったお味噌汁、付け合わせにキュウリの浅漬けという渋いラインナップだ。

それから急ぎつつもしっかり咀嚼して朝食を済ませ、家を出るといつものように梓が玄関先で待っていた。

「おはよう、春菜」

『おはよ、梓』

それからあたし達はゆっくりとした足取りでまだまだなれない桜高校への道程を歩く

「今日から本格的な部活動誘が始まるね」

『そだね。梓は放課後ジャズ研に?』

「うん、とりあえず見学に行ってみようかな、と。春菜も来る?」

『昨日も言っただけどあたしはパス。演奏するならロックとかのほうがいいし』

「ふーん、そっか」

梓は若干残念そうにしながらもあつさり諦めた

それから他愛もない会話をしているといつのまにか学校に着いていたので昇降口で上履きに履き替えて梓と共に教室に向かう。

とりあえず梓と同じクラスでホツとした。

ちなみに、合格発表の日にハイテンションだった家族がいた受験生…平沢さんも同じクラスだった

憂「私は平沢憂。よろしくね」

『よろしく、平沢さん。あたしは柏木春菜。で、こっちは友達の中野梓』

梓「よろしくです」

憂「柏木さんに中野さんだね?よろしくね」

平沢さんがにっこり微笑む。

わりと優等生っぽい人だな…課題とか出たら教えてもらおう。うん。

それから放課後。

一年生は明日から授業なのでろくにすることがなく終わる。

それで梓と2人でこれからどうするか話しながら中庭を歩いていると、

着ぐるみを着た謎の四人組が並んでビラを配っていた。

…何あれ。

謎の四人組は道行く新入生にビラを渡そうとしていた。

？「軽音部です。よかったら見に来てね！。」

可愛くない猫（？）の着ぐるみを着た軽音部と名乗る人が新入生に避けられていた。

……………マチであれが軽音部？

あたしが頭を抱えていると遠くから平沢さんがやって来た。

『あ、平沢さ…』

？「うーいー！」

憂「あ、おねえ…ひっ！」

鶏の着ぐるみを着た人が平沢さんに息を切らしながら走り寄り、その声を聞いた平沢さんが一瞬何故か嬉しそうな表情をするが、すぐに驚愕と恐怖の顔をして逃げていった。

……まー、あれは恐いだろ。普通に。

「何だろうね…あれ…」

しばらく固まっていたのか梓はやっと口を開いた。

『あたしに聞かれても』

わかるわけない。

？「あ、あの…」

『え？…わっ！？』

後ろから声を掛けられたので振り返ると、馬の着ぐるみを着た人がビラを差し出しながら声をかけていた。

？「軽音部です。よかつたら見に来てね」

見た目に反して（馬の着ぐるみのせいだけど）落ち着いた口調で話しながらあたしと梓にビラを渡してきた。

「……………」

梓は再び固まってしまったので、代わりにあたしが2人分を受け取

る形になった。

それから馬の着ぐるみの人はペコリとお辞儀してから他の着ぐるみの人の元に帰っていった

「……………あそこに入部するの？」

梓は先程馬の着ぐるみの人に貰ったビラに目を通しながら聞いてきた

『うん…とりあえず見てから決めることにする』

「そっか、じゃあ私はジャズ研を覗いてくるから」

『うん、またね』

梓はジャズ研の部室に向かっていった。

さてと、あたしも見に行ってみますか。

それから音楽室を覗くと平沢さんが居た。さらに奥を覗き込むと何故かジャージ姿の軽音部の人達が演奏を始めた

…全然音があってないし。ただの練習でわざとなのかな…

見るべき所がなさそうだったのでとりあえず講堂に向かうことにした。

『どうだった？ジャズ研は』

「どうもこうもないよ。ただのジャズ好きの集まりでさ、自分で演奏しようっていう人が全然いないの」

梓が肩を竦めて呆れていた。

「そういう春菜はどうだったの？」

『あたし？どうかな…確かに演奏に魅力は感じなかったけど、練習だったし…』

ライブ見ればわかると思うけどね

『とりあえず、見にいこつか。梓もジャズ研は入らないんでしょ？』

「うん、演奏する気はないみたいだから」

『じゃあ決まりだね』

それからあたしは梓と2人で新入生歓迎会を見に行った。

それから色々なクラブの発表が催されたけど、あたしには興味が全く沸かなかった。

それは梓も同じで、どこかつまらなそうな表情をしている。

憂「あれ？柏木さんに中野さん？」

『…平沢さん？』

今しがたやって来たのか平沢さんが講堂の入り口側から近寄ってきた。

憂「柏木さん達もお姉ちゃん達のライブ見にきたんだね？」

『…お姉ちゃん？』

憂「うん、ギターとボーカルを担当してるの」

平沢さんは嬉しそうに語る。まあ、身内がバンドの中心でやってるとなれば分からなくはないけど

【これより、軽音部のライブ演奏です】

おっと、そろそろ始まるみたい。

平沢さんのお姉さんは…あの人かな。ギター持ってるし。

唯「こんにちわー！桜高軽音部です！」

あ。この声…平沢さんを追いかけていた鶏の着ぐるみの人だ。

唯「いやー私ね、最初は軽い音楽と聞いて、口笛でも吹くのかなー
って思ってた」

どんな音楽だそりゃ

唯「では聴いて下さい、ふわふわ時間タイム」

そろそろ始まるかな？

唯「あ、そうそう！私ギター始めたのも高校に入ってからでー」

？「いい加減にせんかい！」

平沢さんのお姉さんがドラムの人に突っ込まれていた。

…平沢さんはしっかりしてるのにお姉さんは天然だな、ありや

それからして演奏が始まった。軽音部の音楽はポップス調のロックといった感じで悪くない。演奏技術はそれなり。

でも…何だろう…どこかウキウキするというか…

それから気がつくと演奏が終わっていた。

視線を横に向けると梓が感動したような表情し、平沢さんがニコニコしていた

『あたし入部するよ』

下校途中。あたしは梓にポツリと呟くように言った

「え？」

『軽音部。あたし入部することに決めた』

「…そうなんだ…」

『梓はどうする？一緒に入らない？』

「……春菜はどうして入部することに決めたの？」

『そうだなあ…何か感動した、かな。』

あたしはあの決して上手くない演奏に魅了されたのだと思った。

だからあの中にあたしも入りたい。そう感じたのだと梓に語ると

「私と同じ、だね」

梓もどこか満ち足りたような表情を浮かべていた

「じゃあ…一緒に入部、しよっか」

『うん！』

あたしは満面の笑みで答え、梓もどこか嬉しそうにしつつ2人でそれぞれの家路に着いた

明日は軽音部に行こう。そしてあの中に入れてもらおう、そう心に決めていた

3 話へ

#2・新歓！（後書き）

今回は本格的にメンバーと接触します（ニアミスなら何度かありますが。澁だけは着ぐるみ状態で接触済み）

主人公の一人称の変更の理由は声のイメージが伊藤か○恵さんだからです（イメージとしては某心の卵がでる作品の主人公といった感じです）

それではご意見・ご感想をどうかよろしくお願いしますm（――）
m

#3・入部！

「今日、音楽室に行くの？」

翌朝。いつものように梓と2人で登校すると、唐突に尋ねてきた。

『そのつもり。早いほうがいいと思って』

そう答えつつ、あたしは楽器ケースに入ったベースを軽く揺らす。

ちなみに梓も愛用のギター【ムスタング】を持ってきている。

考えていることは同じ、ということだ

そして授業が終わり、運命の放課後。

あたし達は音楽室の前に来ていた。

？「…こうなったら……ちゃんを拉致るしか！」

？「拉致とか言うな」

何だか物騒な単語が出た気がする

ここまで来たら行くしかないよね…

あたしが代表して音楽室に入ることにした

『あの…すみません』

梓「軽音部ってここですか？入部希望なんですけど……」

梓があたしの言葉を繋いできた

???「「「……………!?!?!」」」

メンバーの3人が固まった。

……………3人？

?「確保—————!」

梓「ぎゃ—————っ!?!」

『ひにゃああああ!?!?』

ライブでドラムをやっていた人が唐突に飛び掛かり、あたしと梓は奇声を上げた

……………恥ずかしすぎる

?「ようこそ軽音部へ!」

唯「ほらこっち座って座って」

あたしと梓は勧められるままに椅子に座った。

唯「お名前は何ていうの?」

梓「あ…中野…」

？「パートは何やってるの？」

梓「あ…えつと…」

梓とあたしは質問責めにあっていた。梓は困惑し、あたしはとりあえず収まるまで愛想笑いで誤魔化している

小学生の頃、転校してきた時に質問責めにあった経験を生かしているのだ

唯「誕生日は？血液型は？」

？「好きな食べ物？」

梓「えつと…あの…」

？「落ち着けお前ら」

平沢さんのお姉さん…唯先輩とライブでドラムをやっていた人をベイスをしていた人がたしなめた

梓「えつと、1年2組の中野梓といいます。パートはギターを少し…」

『同じく1年2組の柏木春菜です。パートはベースをやってます』

？「お、梓は唯と一緒に春菜は澪と一緒にだな！」

梓「よろしくお願いします、唯先輩」

『よろしくお願いします』

唯「唯先輩…（キューン）」

漣「秋山漣です。よろしく、春菜」

『はい、秋山先輩』

あたしが秋山先輩に挨拶をしていると、梓が苦笑いしていた。視線を向けると唯先輩がトリップしていた

？「おい、帰ってこい」

ドラムをやっていた人が唯先輩に声を掛けると「はっ！？」と我に返った

先輩に陶醉してたのかな…

唯「とりあえず何か弾いてみせて」

梓「まだ初心者なので下手ですけど…」

唯先輩が自分のギターを梓に手渡した。梓は重そうにしている。

あれは重いだろうなあ。…というか梓が初心者ならどこからがベテランなんだ

唯「大丈夫！私が教えてあげるから！」

漣「お、早くも先輩風吹かせてるな！」

梓「それじゃ…」

梓が唯先輩のギターで演奏を始める。…うん、使い慣れないギターでも上手く弾けてるね

秋山先輩と唯先輩が固まっていた。多分梓の実力を理解したのだろう

梓「ごめんなさい、やっぱり聞き苦しかったですよね…」

梓が落ち込む。相変わらず自分を過小評価してるね…

漣「あ、いやそういうわけじゃ…」

唯「ま、まだまだだね！」

貴女はどこぞのテニス少年ですか。

漣「次は春菜かな。あ、でも私のは左利き用だから…」

『大丈夫ですよ、秋山先輩。あたしは持ってきてますから』

そういうとあたしは音楽室の入り口に立て掛けてあった楽器ケースを持ってきて、ベースを取り出す。
ちなみにあたしのは真っ青な色合いの下地に稲妻がデザインされた

タイプだ。

唯「か、カッコいい！」

漣「右利き用はあまり詳しくないけど、見たことないタイプだな」

『これは幼い時にアメリカで買ったものですから。多分日本にはほとんど売られてないタイプだと思いますよ』

唯「へ？あめりかつて、外国？」

梓「春菜は小3の頃までアメリカに住んでいたんですよ」

梓が唯先輩の疑問に答える。当のあたしはたとえ披露するとはいえ、やるからには集中する主義だ。

やがて唯先輩や秋山先輩達の声が聞こえなくなる…

- 梓視点 -

私が唯先輩に春菜のことを説明しているとこの雰囲気とは別な凛とした空気が伝わってくる。

――春菜が集中してるんだ。

私が春菜に視線を向けると元々つり目気味の目が鋭く細くなっている。

アレは相変わらず怖いけど、あの目は春菜が本気で演奏する証だ。

春菜「……………」

春菜が演奏を始めた。相変わらずとてつもなく上手い。私はアレをいつも聴いてるから自分の演奏に自信が持てない。だから春菜が軽音部を気に入る理由もよくはわからなかった。

春菜は部活でのバンドは今しか出来ないと言ってたけど、やっぱり外バンに入れてもらったほうがいいんじゃないかと私は漠然と思っていた

――そして演奏は終了する。

- 梓視点終了 -

あたしが演奏を終わらせると全員が固まっていた。

いや、梓はあたしの実力知ってるだろうに。

漣「……………すごい」

？「なんというか…プロとアマの違いを見せつけられたというか…」

いや、あたしはプロじゃないし

唯「すごーい！プロみたいだったよ春菜ちゃん！」

『あ、ありがとう…！ございます』

漣「それにしてもかなり上手かったけど、いつから始めたんだ？」

『5歳の時です』

「「「「「う、うさい!？」「「「「「

全員が驚く。

『あれ？梓には話してなかったっけ？』

梓「聞いてないよ!…うう、道理でかなり上手いと思ってたら…」

『あたしから見たら梓もかなりの腕なんだけどなあ』

梓「そんなことないよ!」

何故力一杯否定しますか

？「それにしても、とんでもない大型新人がはいつてきたな」

？「これなら優勝間違いなしね」

ライブでキーボードをやっていた人がほんわかと喜ぶ。

優勝って…どこに出る気ですか、先輩たち。

梓「あの…私、もう一度唯先輩のギターを聞きたいです!」

唯「えーっ!？」

梓のお願いに唯先輩が驚く。そりゃ、梓の演奏見たあとだとしづらいよね

唯「あー…えーっと……ライブのせいでぎっくり腰になったからまた今度ね!」

ぎっくり腰って…貴女は老人ですか

?「もういいからどいてろ」

唯「あーん」

唯先輩がドラムをやっていた人にどけられる。…そう言えばあの人の名前まだ聞いてないな

?「と、とにかく入部してくれるってことでいいんだよね?」

梓「はい!」

『あ、はい。ええと…』

?「そういえばまだ名乗ってなかったな。私は田井中律。そしてこっちでお茶を淹れてるのが琴吹紬」

紬「よろしくね、梓ちゃん、春菜ちゃん」

梓「は、はい!」

『よろしくお願いします』

梓「私、新歓ライブのみなさんの演奏を聞いて感動しました!これ

からよろしく願いします！」

唯「うう…まぶしすぎて直視できません…」

梓ユリアの純な感想に唯先輩が顔を覆って呟いた

あたしと田井中先輩は苦笑いした

律「それじゃ入部届受け取ったから明日からよろしくね！」

『はい』

梓「はいっ！」

『それでは失礼します』

梓「失礼します」

あたしと梓が音楽室から出ていきふと振り返ると唯先輩が困り果てた表情をし、田井中先輩が呆れていた。

4 話へ

#3・入部！（後書き）

原作の流れを改めて確認しつつ、主人公視点と初の梓視点を交えて書きましたがいかがでしょうか？

ポイントが全然入っていないので、ここの読者様は辛口なのでしょうが…

まだまだ文章が拙いですが、できればご意見・ご感想をよろしくお願ひしますm（――）m

#4・活動！（1）

そして翌日。

今日から軽音部活動の日だ。

『なんだか楽しそうな人達だから、気軽にできそうだね』

梓「真面目にやらないとダメだよ！先輩がただってあんなに上手いんだから」

『そうかなあ』

あたしには上手いとは思えなかった。でも何か気持ち的な物は感じたと思う。

それから何事もなく午前中の授業が終わり、お昼休み。平沢さ…憂が私と梓の元にやって来た。

憂「一緒にお昼しよ」

梓「うん」

『構わないわよ』

あたし達は隣の空席の椅子を机の横に置き、1つの席を囲むようにしてお弁当を食べ始める。

ちなみに使ってる机はあたしの席なのであたしが普通に使い、梓はあたしの前の席の椅子を後ろにして対面する位置にし、憂は横側という位置だ。

憂「2人とも、軽音部はどうだった？」

梓「素敵な所だった。でも質問責めばかりで練習風景は見れなかったけど」

憂「あはは…」

憂は何か知っているのか、愛想笑いを浮かべている。

たぶんいつもはのんびりしているのだろうとあたしは推測した

憂「ところで、2人は一緒にバンド組んだことはあるの？」

『あるわよ。中学1年から3年の春まで』

梓「以降は受験があるから解散になったの。他のみんなはどうしてるかな…」

梓が自分のお弁当をつつきながらも思いに更ける。

『そうだね、ゆっことかなり元氣かな…』

憂「それってあだ名？誰が付けたの？」

梓「春菜だよ。春菜って人にあだ名を付けるのが好きなの。」

『梓は付けさせてくれないけどね』

梓「だって恥ずかしいし」

肩をすくめるあたしに梓は口を尖らせて反論する。

じゃあゆつことかなりんはいいんかい。

憂「じゃあ、私に付けてくれる？」

『え、いいの？』

憂の思わぬセリフにあたしは目を輝かせた。あ、若干愛想笑いになつてる。そんなに変なあだ名付けないわよ…たぶん。

『じゃあ…ういるんはどう？』

憂「い、いいんじゃないかな」

梓「嫌ならハッキリ言つたほうがいいよ？一度決まったら春菜は絶対変更しないし」

憂の愛想笑いに梓は口をはさむ。失礼しちゃうなあ。一応本人の意見は聞くよ？ほとんど聞くだけだけど

憂「私は構わないよ。なんだか親しくなつた気がするし」

梓「普通に呼び捨てな私は親しくないってこと？」

憂「そんなことないと思うけど…」

『何言つてんのさ。梓が付けさせてくれないんじゃん』

梓「だって変なのは嫌だから」

『変ってひどーい』

憂「あはは」

憂に笑われた。

何はともあれ放課後。ちなみに憂はついるんと呼ぶことにしました。だって拒否しなかったし。

『こんにちわー』

梓「こんにちわーっ！」

梓が大きな声で挨拶する。

律「お、元気いっぱいだな」

梓「はい、放課後が待ち遠しかったです！」

『梓ったら最後の授業のときはソワソワしてたもんね？』

梓「そんなことないよーっ！」

律「それじゃさっそく…」

部長が紬先輩を見る。梓が期待の眼差しで見ている…

律「お茶にするか」

『あ、ごちそうになります』

梓「えーっ！って春菜まで！？」

5 話へ

#4・活動！(1)(後書き)

m 今回から短く纏めることにしましたので…ご容赦下さい m (――)

#5 活動！（2）

梓「あ…あの、部室でこんなことして大丈夫なんですか？」

あたしは奨められた椅子に座り、琴吹先輩が淹れてくれた紅茶を飲みつつ、梓を横目で見た。

まあ、普通は有り得ないよね…あたしは順応してきてるけど。

???「あ！」

その時。音楽室のドアが開き、小さな眼鏡をかけてスーツを着た知的な女性が立っていた

梓「あ…あの、これは…」

おどおど焦る梓。でも先輩方は動じてないから大丈夫なんだろうとあたしは我関せずを貫いた。

???「私、ミルクティーね！」

知的女性が普通に注文する。

琴吹先輩がおつとり返事し、その態度に梓が驚愕する。これにはあたしも少し驚いたけど

???「この子達が新入部員？」

唯「そうだよー」

知的女性が尋ねると唯先輩がポケポケと答える。

あたしは取り敢えず飲みかけの紅茶が入ったティーカップを置いて立ち上がる

さわ子「顧問の山中さわ子です。よろしくね」

梓「よ、よろしくお願いします」

『よろしくお願いします』

梓が緊張気味に、あたしは落ち着いた雰囲気であれど挨拶した。

さわ子「……………」

何故か山中先生は無言であたし達を交互に見る。梓は赤面し、あたしは少し困惑した。

それからいつの間にかお茶会再開。あたしは先輩方と先生と一緒に座って紅茶を飲み、梓は直立不動状態で様子を伺っている。

漣「梓はあんななのに、春菜は落ち着いてるんだな」

『あたし、わりと順応性たかいんですよ。小学校の時も転校してから3日で慣れましたし』

漣「3日…凄いな」

秋山先輩が驚く。まあ、普通なら梓みたいになってるだろうしね。

当の梓はおもむろに愛用のギター…ムスタングを取り出した。

『……』

あたしはなんとなく嫌な予感がしたので制服のポケットに入れてある耳せんをした。

ジャラアアン…！

梓が唐突にギターを弾いた。うん、梓がKYに見えるよ

さわ子「うるさーいつ…！」

梓「ええーっ…！」

山中先生に怒鳴られて梓が驚く。そりゃあお茶会なのにいきなりギター弾いたら怒るよね

律「さ…さわちゃんのアホーッ…！」

さわ子「だって静かにお茶したかったんだもん…！」

律「言い方ってもんがあるだろ！」

部長が山中先生を諭す。

それにしてもあの先生、教師らしくないな。

漣「ごめんね、あの先生ちょっと変なの」

やっぱりか

梓「こんなんじゃないダメですーっ!!」

漣「うわーっ!!キレた!!」

梓がブチキレた

そろそろ止めに入ろうかと耳せんを抜いてから立ち上がる

紬「春菜ちゃん、この状況で随分落ち着いているのね？」

琴吹先輩がおつとりと尋ねる。

貴女ほどじゃないですけどね

梓「みなさんやる気が感じられないです!」

『まあまあ、梓落ち着いて』

梓「春菜も春菜だよ!先輩方と一緒に頑張ってだらけて!」

『あのさ梓、軽音部だからって放課後は常に練習ってわけじゃないのよ?』

梓「だからってだらけていい謂れはないよ!」

『梓。ここでこうしてるのは先輩方…この軽音部にとって必要なこ

となんだよ』

あたしはゆっくり諭すように話す。

漣「だらけすぎな感じもするけどな」

秋山先輩がボソリと呟く

『でも、そのアットホームさで結束を深めてるんだとあたしは思いますけど』

律「なんてーか…春菜は私ら以上にここの事わかってるよなあ」

唯「そうだねー」

部長が感心し、唯先輩がポケポケと同意する。

梓「でも音楽室を私物化するのはいけないと思います！ティーセツトは全部撤去すべきです！」

さわ子「それだけは勘弁して!!」

梓「なんで先生が言うんですかーっ!!」

『梓…いい加減にしなよ。あたし、怒っちゃうよ?』

あたしが満面の笑みを浮かべると梓は小刻みに震え始めた。あ、ス
イッチ入ったかも…

梓「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…アレは勘弁して…」

梓が虚ろな目でガクブルと震える

漣「春菜…梓に何したんだ…？」

『昔ちよつと…ね…』

あたしはばつが悪そうに苦笑しながら視線を逸らす。

うん、どこかの誰かが言ってた若さ故の過ちってやつだよ、うん。

当の梓は久し振りのスイッチが切れずにしばらくごめんなさいごめんなさいと呟きながら震え続けていた

6 話へ

6・活動！(3) (前書き)

今回以降、つながらり重視のため後書きと前書きなしにします

#6・活動！（3）

梓「取り乱してすませんでした…」

『色々すみません』

あたしと梓がほぼ同時に謝ると秋山先輩が苦笑しました

漣「でも梓が言う事も一理あるよ。私たちもつとやる気出していかない」と

といいつつ秋山先輩は唯先輩と山中先生達に振り返り

漣「わかりましたね！」

唯「はい」

強い口調で声をかけ、唯先輩は半べそかきながらうなだれてました。山中先生もげんなりしてます

律「ま、まあその辺のことに關してはまた明日ということだ」

漣「丸投げするな」

律「だってさー」

梓「えと、今日はこれで失礼します」

言い合いになりだした部長と秋山先輩にやや遠慮がちにしつつ、梓

が話す

『あ、じゃああたしも』

唯「春菜ちゃん、梓ちゃんまた明日ね」

紬「2人の分のカップも持ってくるわね」

あたしの言葉を聞いた唯先輩がのほほんと、琴吹先輩がおっとりと挨拶をかわす

律「おう、またな」

澪「明日な」

それに追いかけるように言い合いをしていた部長と秋山先輩も挨拶をかわす

梓「『失礼しました』」

それに合わせてあたしと梓は同時に挨拶してから音楽室をあとにしたその帰り道、あたしと梓は2人で帰路についていた。ちなみに憂ことづいるんは帰宅部なのでこの場にはいない

梓「あーあ、結局今日も練習できなかったなあ」

『あれが軽音部のスタイルなんじゃない？普段はああしてお茶を飲んでまったり英気を養い、いざライブ近づいたら爆発的に集中するタイプ』

梓「養いすぎだと思うけど」

あたしが軽音部の活動スタイルについて意見すると梓はむくれながら反論する

『まあたしかに毎日練習しないとなかなか上達しないと思うけど… ああいうスタイルをとっててあだけの演奏ができるなら、あたしはいいと思うよ』

梓「でも逆に普段あれだけサボっててライブであんな演奏出来るならもっと練習すれば…」

『うん、たしかにもっと上達するかもしれない。でも軽音部は部活動：音楽が好きな者同士がするんであってプロじゃない。本気でプロ目指すならともかく、趣味感覚でするならあれでいいと思うよ』

あたしの自論に梓は黙り込んだ

『梓は今の軽音部は嫌い？』

梓「そんなことない！」

『じゃあそれでいいでしょ？さ、この話はおしまい！』

あたしは梓の言葉のあとに手拍子を打って強引に打ち切った

梓「春菜は強引だなあ」

あたしが無理矢理会話を打ち切ったあと、梓は軽くため息をつきながら呟いた

『だってそうしないといつまでも終わらないじゃない』

あたしはややムツとしつつ梓に反論する

梓「はいはい、私が悪かったですよー」

あたしの言葉に梓が肩をすくめながら受け流した

『……はあ……』

その様子にこれ以上反論しても無駄だと諦めてあたしは深くため息をつく

何はともあれ、あたしと梓の部活動二日目は終わりをつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1541m/>

けいおん！？

2010年10月9日01時23分発行